

## 『古今犬著聞集』と武辺咄

——「誹諧」作者の説話——

大久保 順 子

椋梨一雪の天和四年（一六八四）の序をもつ全十二巻の一大説話集『古今犬著聞集』について、前稿<sup>1)</sup>では序文と和歌・連歌に関連する説話例をもとに、本作品が成立した天和年間以前、殊に明暦から寛文・延宝期の頃の作者の〈当代〉の説話態度や注釈的な意識に関わるとみられる部分を探り、特に文事への興味を示す志向性について考察した。序文の内容は、作者が長年、様々な人々の談話に取材し説話を蒐集してきた経緯を物語っている。しかし本作品の場合、口承に限らず、当時刊行され流布していた文献による書承的影響も少なくないと考える。

本作品内の三百九十一話に渡る多様な説話の中には、作者の先祖「成田三郎兵衛」と浄土宗「弥陀誓願四十八願」由来の家紋を語る巻九ノ四五「椋梨家紋三頭左巴左向亀の事」や、武家教訓集である巻五ノ七「今村六之助異見条々」、巻四ノ二四「奥平源八敵討事」や巻五の二「高谷無益兄弟取籠事」といった事件譚等、作者椋梨一雪の武道に対する高い関心が窺われる話群がある。それらの武家説話の系譜は、一雪が後に再編した説話集『日本武士鑑』（元禄九年刊）や『続著聞集』（宝永元年序）に繋がっている。本論では、『古今犬著聞集』の武家関連説話のうち、著名な武将の逸話と話材の共通する武将譚が、当時刊行された武辺咄集の作品にも存在することに着目する。武辺

<sup>1)</sup>『古今犬著聞集』と武辺咄

咄集とは、軍記・軍談に対して「特定の人物・一族に偏らず、多数の武士たちの合戦などの生活体験を記述した説話を、人物中心に集めたもの」<sup>③</sup>といわれる。『古今犬著聞集』作者もまた、様々な逸話を豊富に含む当代の武辺咄集の読者としてそれらを意識し、話材を摂取し、さらには後の武家説話に影響を与えている可能性がある。具体的な本文の対比を通して浮かび上がる本作品の特質——人物像の捉え方、その構成や表現の志向性等について考察したい。

## 一、「木村長門守」像の語り方

『古今犬著聞集』巻八ノ二八「木村長門守事」<sup>④</sup>は、次のように構成されている（以下、本論における作品本文の引用では、適宜改行を行い、番号や傍線は引用者が付した）。

①大坂の城、今はかふと見へし所に、木村長門守、風呂入、髪を洗ひ、伽羅を焼せ、其間に、江口の曲舞、紅花の春の旦と、余念なけに謡、小鼓を打しとぞ

②其時、髪をすき香を焼ける女は、木田意運と云外科の伯母にて、生残て予にかたられし

③次の日、花やかに討死しける、しるしを大権現様御覧し、御泪を流させ給ひ、此若者はいつの頃に、かく計作法まで知りけるそ、但し、城中いそかわしかりけるにや、髪に伽羅焼ながら、月代を剃さりしと、仰侍しとぞ  
豊臣方の木村長門守重成が若くして最期の覚悟を極めたという戦いは、『古今犬著聞集』以前の大坂陣を扱った軍記等の諸作品の中でも、例えば次のような名将譚として語られている。

・木村長門守は（中略）けふのいくさにも敵多く打取て。名を得たる事数箇度なりといへ共。うしろあばらに有ければ。今はうちじにせんと思ひ切たるけしきを郎等見ければ（略）なんぢらはしるまじきぞ。弓矢取みのならひしぬべき所にてしなざればかならずこうくはい有事也。我さいこの躰よくくみて殿様へ言上すべしといひすてゝ。敵のむらかつてひかへたる中にかけ入。くもてかくなは十文じやつはなかたといふ物に。さんく

切つてまはり。かけぬけてみてあれば。うすでふかで十四箇所までおひければ。今はかうとや思ひけんくらかさにつつ立あがり。日頃をとにも聞つらん。今はめにもみよ。秀頼公の御めのとの子に。木村長門守といふ大かうの者ぞ。木村が首取てぶしのめいよにせよ。さる者ありとは両御所にもしられたるぞとなつて。あたりをはらつてひかへたるを。東国のはやりおのこのわかむしや共。十きばかりをつかさなりつゝに木村をうちにけり。〔『大坂物語』下〕<sup>(5)</sup>

・慶長廿年。五月七日大坂落城の時。秀頼公の乳母子木村長門守こそ。恥ある討死して上下感じ合けるとぞ。忝くも 大相国公御感のあまり後頸をめしよせ。御覽ありて不便の次第也。討死をきはめて出けるよと。のたまふ。いづれの所を御覽有て。かくはのたまふやらんと。幸田上野守叔父の三也に尋られければ。三也さる事あり。甲のしのびの緒を真結にして。端を切てすてたり。ふたゝび此甲をぬぐましきとの義。討死の覚悟こゝにあらはれぬるといへり。やさしき武士の心ばせにや  
(中山三柳『醍醐隨筆』上)<sup>(6)</sup>

この例では、勇猛な「思ひきつたる躰」の「名乗」や「甲のしのびの緒」の「真結」「端を切」等の様子に「討死の覚悟」が表れている。だが『古今犬著聞集』の長門守の①「伽羅を焼せ」③「髪に伽羅焼」という香の嗜みを伝える経緯については、武辺咄集作品である松田秀任『武者物語』巻上(明暦二年三月刊)、及び同『武者物語之抄』(寛文九年二月刊)巻三での木村長門守の討死時の逸話にあるものが、比較的早い例とみられる。

長門守頸をは、井伊掃部頭直孝内安藤長三郎といふ侍、十七歳にて討捕、家康公、木村が頸を実検あるに、かの首の出るや。いなや。唯今そら焼をすることく、伽羅の匂ひ、ことくくしてあたりにみつる。家康公御らん有て、其せがれば、いつのまに、左様には心付たると仰られて、御ほめなされたとはいへり

(『武者物語之抄』巻三)<sup>(7)</sup>

この部分の「そら焼き」「伽羅の匂ひ」と家康公の感嘆という点が、『古今犬著聞集』「木村長門守事」と共通する。だが、『武者物語』『武者物語之抄』の長門守の話の場合、大坂陣以前のやや異なつた事情が窺われる。『武者物語之抄』巻三の該当部分を参照する。

・摂州大坂の冬陳七、八年まへに、掃除坊主へ。剛ざれを仕かけ給へは。坊主、大きに腹立し。すはとも。いはゞもつて。まいらんと思ふけしき。見ゆる

・長門守是を見給ひ、すこしもさはかぬ躰にて申さるゝは、我思ふ子細なくは、汝をば遁すまじき物をと、いひ捨て奥へ入る

・後藤又兵衛は、木村が振舞を見て舌をまく、其時、人く申けるは、先年、我思ふ子細なくはといひし言葉は、此節をや心がけたらるらんとて、何も感じけるとなり

とあり、掃除坊主との争いの際に長門守が言い放った言葉の通り、後の大坂陣で奮戦の末討死したという武勇を人々が賞嘆した、というのが主要な筋であり、「伽羅」の話はそこに付加された形で語られているといえる。

この話の造型を考えるにあたり、『武者物語』と『武者物語之抄』の二作品の形態と、作者松田秀任の論評の姿勢について確認する。『武者物語』『武者物語之抄』とも、作者松田秀任の自署的な「秀任綴」の字が各巻頭に記される。『武者物語』の方の原文は、一つ書きの各話の冒頭「古き侍の物語に曰」以下、武士の逸話が掲載され、続く一字下げの「私に曰」等の部分に、筆者の見解らしき内容が加えられる、という形となっている。それに対し、後に刊行された『武者物語之抄』では、『武者物語』と概ね共通する武士の逸話本文（『武者物語』の「私に曰」部分を含む）がまず一つ書きで掲げられ、その各話末の二字下げの箇所にも、さらに「伝へて書…」「右の物語…」以降の、『武者物語』にはなかった）作者の論説部分の文章が続く、という形式をとる。『武者物語』が成立した後、その作者が所収話を再検討し、後の『武者物語之抄』で同作者がさらに個々の逸話の注釈や解説及び補説を「抄」として加えた、という説話形成の過程が文脈として発生する。二作品の関係は『武者物語之抄』は『武者物語』の増補改訂版ともいふべきもの」とみられている。『武者物語』の逸話本文と比べて、『武者物語之抄』の方は、元本文の変更や修訂とみられる部分、作者のさらなる注記や批評の姿勢が一段と強められた部分が多く、先行研究では『抄』によって、はじめて、作者の意図が従前になったといった様な充実ぶり<sup>10</sup>とも評価されている。森暁子は「松田秀任と加賀」<sup>11</sup>において、作者松田秀任の浪人兵学者としての出自や編集環境、所収される戦国時代の軍記や兵談

の独自の傾向性を指摘する。

『武者物語之抄』卷三の木村長門守の話の場合も、前掲の文章の部分に続く「右の物語に付」以下、話末に展開する次のような論評に、作者の事件観が示されている。

・長門守殿の胸中を愚拙察て云、太閤様御存命ならば、坊主をそのまゝはおかせられましき物をと、無念におもはれたる成へし、又、勘忍の事は、御代替り秀頼様御若ゆへ、天下あしくなれば。御代とても此まゝには治るまじきなれば、大事の前の小事を。しいでかしては、人のあざけりならんに、只今の恥辱をかんになん仕り、此意趣を遂る場あらんと見さだめて。とゝまりしは。長門守殿若年といへとも、生れながら常の人にはあらぬとこそおもはるれ。

・惣して我より目下なる人、又はあいてに不足なる者にはかんになんなくては。叶はざる儀なれば。長門守も相手に不足なる故、是非なくかんにん成へし。吟味なき人の目よりは、退たることに見えたるも。余儀せず。

作者の論評は、喧嘩した坊主に「堪忍」した事件と、その「意趣を遂る」大坂陣での長門守の活躍との因果関係に注目している。もとより『武者物語之抄』卷三の本話の目録題自体が「秀頼公御乳母子木村長門守殿、掃除坊主へこはざれを仕かけ、腹をたゝせられし事」となっており、論じる作者の関心と眼目は、「吟味なき人」には見抜けない）長門守の武人たる有言実行の意気や、「堪忍」を晴らした活躍にあるといえるだろう。さらに続く話末の論評部分では、大坂の陣の鳴野口の軍談の話題に語りの力が注がれている。

このような武辺咄集の作品の語りと比べて、『古今犬著聞集』巻八ノ二八「木村長門守事」の語り方には、感觸の質的な違いがある。前掲の本話の①②③を顧みると、このうち③は『武者物語』『武者物語之抄』にも伝えられる木村長門守の武人としての最期と、首実検時の「伽羅」残香への家康の感嘆の話であり、大坂陣の軍の武辺咄的な内容であった。だが、①その「伽羅」の香の元である当日朝の逸話と、②目撃した人物の存在とその証言といった内容は、『武者物語』『武者物語之抄』『大坂物語』『醍醐隨筆』にはみられない。②などは証言者を情報源とする、別の系統の秘話的な部分である可能性もあるが、①に窺われるものは、『武者物語之抄』のような合戦の集団の戦況や

兵学的な関心というよりも、決死の出陣に赴く前の長門守の、特に若武者の整容の様子と態度といったものへの興味である。①「紅花の春の旦」とは、長門守がその朝の身支度の際に「余念なげに謡」ったという「江口の曲舞」のシテの章句

紅花の春の朝、紅錦繡の山、粧ひをなすと見えしも、夕べの風に誘はれ、黄葉の秋の夕、黄纈纈の林、色を含むといへども、朝の霜にうつろふ、松風蘿月に、言葉を交わす賓客も、去て来る事なし、翠帳紅闇に、枕を並べし妹背も、いつの間にかは隔つらん、をよそ心なき草木、情ある人倫、いづれあはれを免るべき、かくは思ひ知りながら、ある時は色に染み、貪着の思ひ浅からず（謡曲「江口」）

に当たる。付添で「香を焼」く時の様子を目撃した、武人ではない女性人物からの言い伝えという、裏話風の実話紹介的な興味の②に、章句「紅花の春の旦」を引用した表現を用いて①の長門守の「余念なげに謡」場面が挿入されるかのごとき記述が加わると、③の大坂陣の逸話の「花やか」と、『江口』の後シテの遊君の靈の曲舞の詞章の語感が共鳴し、そこに不思議と優美な趣が添えられてしまう。目撃者の裏話を作者が実際に聞いた、という、いかにも「実話的」な語り方——逆にある種「まことしやかな」言い方であればあるほど、真偽不明な印象を与えるところもあるが——こうした語りの部分によって、長門守のイメージの「花やか」さは、武骨な勇猛さよりも柔和な美的形象として、もたらされる。『古今犬著聞集』の作者は、『大坂物語』や『武者物語』等で既に有名であり、人々に共有されていた長門守の軍談に、「今」の読者にも実感させるような身近な目撃者談的な要素と、詞章を利用した語りという文芸的な文飾を添えて、「伽羅」を焼いていた若き武将「長門守」像を語ろうとしたのではないか。

その後、『古今犬著聞集』を再編した一雪の『続著聞集』が、さらに後代に再編集されて寛延二年（一七四九）に刊行された『新著聞集』崇行篇卷五に、「木村長門守事」とほぼ同文の説話が所収された。その題は「木村長門守最期雪操」となっている。このような題名の付け方には、一雪説話の本文が造型した美的な長門守像の印象が反映され定着しているようにも思われる。さらに後の神沢杜口「翁草」卷四十五「木村長門守重成の事」では、「伽羅」が「蘭奢待」となり、また、月代の話や、首実檢に立ち会う両御所と家臣団の様子まで総合的に脚色されたような場面



が造型されている。

此数箇の功僅生年十九歳の重成が智勇全く遂之事如何成る功士も及がたし。翌年夏陣には死を決して胃の中に蘭奢待を焼きしめ、忍緒の末を絶て討死を諸人に示し、類ひ無き死を遂て、芳名千載に輝す、後世豈斯る英雄有んやと云々。(中略) 楮首を上覧有り、大御所扱々能嗜哉と上意有り、依之諸人心を付るに、此首甚薫す、阿部備中守、本多上野介感心の余り、立寄て耳鼻を嗅ぐに、口には鶏舌香を含み、耳鼻同じく薫葉を詰て、向暑の砌なれ共聊の臭気なく、重成元来美質なれば、其首の見事さ諭る者無し(中略) 御小姓衆の内より加程最後を嗜む身に月代の少し延しは奈何と囁くを、両公再び御叱有りて、夫は風気なる歟、または胃のしまりの為に、態と剃ざる歟成べし、死を決したる首なれば、忍緒の端は必定切て可有、改見よと御意に随ひ改之に、果して上意の如く成りとぞ。<sup>14)</sup>

この例では複数の要素を多く盛り込み過ぎる感もあるが、坊主への意趣の話よりも香の嗜みの話の方が、後代の逸話で強調されていた動向が窺われ、『古今犬著聞集』から『新著聞集』以降の後代にも「伽羅」の要素は大きく影響を与えているとみられる。

## 二、「付句」の説話の構成

『古今犬著聞集』の語り口の特徴は、話材から採られた話題の結び付け方とその配列によっても生まれている。巻一ノ三八「兼良公元服付調伏連哥事」は、異なる三つの人物逸話から、連歌の付句に関連する部分が採られ、構成された一話とみることができる。三つの部分をA・B・Cとし、次に簡略に示す。<sup>15)</sup>この話の場合、各話題と詠句を語る部分の末尾それぞれに、作者の見解を窺わせる評語的部分がある。

A (一条撰政兼良公元服時(十二歳) 虚空からの声の一句「猿の頭にゑほしきせけり」に付句「元服はひつしの時の傾きて」)

『古今犬著聞集』と武辺咄

↓ 稚わたらせたまふ時より、御才智ゆへ、あらはし給ふ御書籍多く侍りし

B (天正十年愛宕連歌、光秀発句「ときは今」連歌の紹巴の第三句「花落ちる池の流れをせきとめて」と、秀吉への弁明)

↓ 連歌俳諧せむ人は、此心忘るべからずと、先師は申き

C (小山政種の行為と句「兼裁あたま春風そふく」) に対する連歌師兼裁の付句「小山木のこふしの花は散果て」  
↓ 仮名の十七字をもて、人を呪詛する事など有べき事とは、道に至れるきは、無止事もの也

A の兼良元服時の異変の典故は未詳だが、B と C は武将を主人公とした戦記や軍談等に取材した、武辺咄的な内容とみられる。B は軍記等でも知られる明智日向守光秀の「天正十年愛宕連歌」に関わり、本能寺の変の謀叛加担を後日秀吉公に疑われ、弁明する紹巴の機知譚であり、諸書で様々に伝えられている。

(五月) 廿八日、西坊にて連歌興行、発句 維任日向守

ときは今あめが下知る五月哉

水上まさる庭のまつ山

花落つる流れの末を閑とめて

か様に百韻仕り、神前に籠置き、五月廿八日、丹波国亀山へ帰城。

(太田牛一『信長公記』卷十五)<sup>16</sup>

時は今雨が下しる五月哉と光秀云出し、板札に巴書下し候節、しるの文字をけづり、又々知ると書候に(中略)  
右発句に付巴も一味の御詮議有り、先日の文字自分執筆の時には、下なると書置候処、けづり候てしると有り、一味にては曾て無之段申披き候由、先見のある利口発句者と相見得候よし

(木村三暁庵『三暁庵随筆』下「愛宕連歌の事」)<sup>17</sup>

C の小山政種は武蔵国の武将・成田氏長女を母とし、豊臣秀吉の側室の一人・甲斐姫が母の姉妹にあたるとされる人物である。政種の父小山秀綱は天正三年(一五七五)以降、小山祇園城を北条氏照に奪われた。織田信長の総



無事令で天正八年に一時返還された城に復帰したが、天正十八年（一五九〇）秀吉の小田原攻めでは北条方となった結果、秀綱は改易される。その嫡子の政種は「天正七年十月二四日から天正十年頃の間に逃避先の古内で元服した」が、天正九年二月の小山氏文書に再び父秀綱の家督が認められ「小山系図」に夭折とあり、元服後間もなく病死したのではなからうか」とみられている。このCについて、松田秀任『武者物語之抄』巻一「家康公御内本多平八郎殿、子息達の鎧稽古仕たまふを見て腹立いたさるゝ事」の話末評部分「団扇再拜之図」の「小山政種御団の図」に解説する形で、同様の逸話が掲載されている。<sup>18</sup>

小山政種御団の図、下総国小山の天王院に、これあるをうつつす（中略）右の小山政種公、ほろび給ふへき一兩年前に、兼裁といふ連歌師の。つぶりをはり給ひて、かくな

○兼裁つぶりはる風ぞふく

か様に句作り給ひて、兼裁いかにと有し時、兼裁すこしも動ぜず

○小山木のこぶしの花は散はてゝ

と付けるとなり、政種ほろひ給ふへき瑞相なると、心あらん人は風聞せり

この逸話は、明暦二年刊『武者物語』の「本多康俊の教訓」の段には元々なく、『武者物語之抄』巻一の同段で作者が補説する話末評語的部分の中に記されるものである。寛文期頃にこの逸話が流布していたか、あるいは一雪が『武者物語之抄』の読者であったか、寛文九年刊の『武者物語之抄』と天和四年序『古今犬著聞集』との間の何らかの関係の可能性を窺わせる箇所である。

だが同話題の逸話ながら、ここでも二つの作品の間には語り方の微妙な違いが発生している。『武者物語之抄』の小山政種の話は、連歌師の「兼裁すこしも動ぜず」という豪胆さを伝え、この事件を小山氏滅亡の「瑞相」とみる人々の武辺咄興味の「風聞」として印象づけられる。それに対して『古今犬著聞集』の一話は、CがA・Bと合わせられて構成されている。選択された三つの逸話の取り合わせにより、Cの話末評語はAとBの印象とも相俟って、句の十七字の「呪詛」といった行為の効力や、「詠句」の文事の「道にいたれるきは」の「無止事」を賞嘆する

ニュアンスとなり、一種の歌徳説話的な色彩がより強められることとなる。

なお『古今犬著聞集』京大大惣本写本の本文は、Cの人名を「兼載」と表記する。永正七年（一五一〇）の没と伝えられる猪苗代兼載が、天正年間頃に元服したとみられる政種の句に付句をするという設定には、疑問がある。人物としては年代的に、兼載から五代目、天正三年八月何人百韻に出句のある猪苗代兼如が近い<sup>21</sup>。だが連歌の猪苗代家初代の兼載は「猪苗代氏にて陸奥の武士なり。宗祇第一の弟子なれども、弟弟子の宗長に嫡伝をば譲るなり」（黒川道祐『遠碧軒記』下之一）<sup>22</sup>と伝えられ、北野会所奉行を務め著名な武将との交流も多く、東国に帰住し各地に足跡を残した人物である。『古今犬著聞集』で、Aの一条兼良やBの紹巴の逸話と連鎖的に構成され、連歌の歌徳説話的性格の印象が強められたため、Cもまた代表的な連歌師の伝説として後代に伝わることになったとすれば、説話構成のもたらした作用の可能性として興味深い。

### 三、「連歌誹諧せむ人」の連想と表現

松田秀任の『武者物語』『武者物語之抄』においても、武家の関わる文書の逸話への関心はかなり高いものとみられる。巻末「佃軍歌」のような軍学的、道歌的なものに限らず、太田道灌や柴田勝家、大内義隆等の武将和歌を絡めた話題が散見するからである。その中で、平安末期の武将、源頼政の由緒を持つ頼政神社の逸話が『武者物語』巻上及び『武者物語之抄』巻一に存在する。頼政神社については、『古今犬著聞集』巻八ノ二二にも「頼政宮の事」という題の話が収められており、その他の諸書でも由来が伝えられている。以下、D『武者物語之抄』、Eに成立年不明の室町軍記『永享記』<sup>23</sup>、F前掲『翁草』、そしてG『古今犬著聞集』巻八ノ二二から、それぞれの該当箇所本文を掲げる。

D古き侍の物語に曰、源三位入道頼政、宇治の平等院にて自害の時。郎等に向て云、我白骨を平等院に納へからす。頭陀に入れ、汝首にかけて諸国を修行すべし。我とまらんとおもふ所にて、瑞相有へし、其所に骨を納

むべしとありて。自害遂給ふ、其ことく。かの郎等、白骨を首に懸て諸国をめくる、こゝに下総国古河といふ所あり、かの所に着、とある芝原に頭陀をおろし、しはし休息して、扱立あかり、頭陀を取て首にかけんと。しけれ共、頭陀あからず。郎等不審の思ひをなし、さらはこゝに。骨を納めんと思ひ、在所の人をかたらし、古河村の近所に骨を納、其所にかの郎等も庵を結び、行ひすまして、その所にて死したりしと也。今におゐて古河に頼政塚あり、今は古河の城内に。なる。かの塚の有所を頼政曲輪といふなり（『武者物語之抄』巻一）  
E 城南東方に龍崎と云所に、有源三位頼政之廟（一説伊豆守仲綱）、尋其来由、三位入道於平等院、自害之後、郎等下河辺三郎行吉と云人、此地之住人也けるか、頼政の首を討て、衰老の頸を獄門にさらさん事を、無念なりと宣しとて、不違遺言、作山伏之姿、彼首を入桶納笈裡、諸国修行して後帰本国に、此処に笈を置けるに、此笈少も不動、大石のことく、是は不思議なり、此地に住せ給へき験にやとて、此館の鎮守に奉祝、崇一社神、金銀幣帛の祭奠蘋蘩藻の礼物、善尽美尽せり、されは靈神感応、日々に新にして、当城凶事あらんとては此社鳴動す、其験掲焉也、此社前に菩提樹生たり、寄特なりける事多かりき

（『永享記』「古河城の事」）

F 下総国古河に、源三位頼政の塚在り、今は古河城内と成りて、其の所を頼政曲輪と云へり。古き物語に頼政平等院にて自害の時、渡辺党の丁七唱を呼て、我が白骨を持って、諸国を修行すべし、吾止らむと思ふ処にて、奇特有べしとなり。丁七命の如くして、古河に來り、白骨をおろし休んで揚んとするに、揚らず、扱は此の所に止らんとにこそと、則そこに埋み、我も傍に庵居せりと。其の鉦鼓撞木等今に在りと云。按るに、此の説不審。頼政末期に、丁七唱に命じて、関東の源氏を催したるなるべし。其の後丁七此の所に塚を築き住けるならん。（以下略）  
（神沢杜口『翁草』卷二十九 諸録抜粹「頼政塚の事」）

G 源頼政、良等に向、我首を取て帰し、汝、何へも持行へし、其某かあらんとおもふ所に、しるしをみせんと云て、自害させられしを、遺言にまかせ、袋に首を入れて諸国執行せしに、下野国古河に至て首をおろし、休して立んとて引上げるに、あからさりしかは、其に葬しを神にあかめ、社をつくりしを、近き頃、社に額を掛ける

時、館林の御内嬪川彦左衛門能書の聞有て、是をたのみしに、頼政明神の明の字の月の中の筆郭に、半月を書し心は、弓張月を射にまかせてといふ、名句を思ひ出てかきたると、自賛せしとぞ（『古今犬著聞集』巻八）Dでは頼政の遺言と自害、郎等の諸国修行と頭陀の首の動かなくなつた地に築いた社、郎等の庵住が語られる。Eは頼政の遺言と自害、郎等下河辺三郎行吉が山伏となり諸国修行後、故郷の古河に戻り、遺骨の笈の留まつた地に鎮守の社を造立した、という由来記である。F『翁草』は後代の伝で、家臣の名を「渡辺党の丁七唱」とし、D同様に「頼政曲輪」の話を伝えている。

G『古今犬著聞集』巻八ノ二二の前半部分は、頼政の遺言と自害、袋の遺骨が留まつた古河の社造立の点でDの経緯の話に近い。だがGの後半は「近き頃」の蜷川彦左衛門筆の社額の話となる。頼政の有名な和歌を髣髴させる半月の意匠と自賛、という話題だが、頼政歌「ほととぎす名をも雲井にあぐるかな弓張月を射にまかせて」の下の句の表現を用いて語られている。当時の人々に連想される源頼政の伝説が、著名な謡曲『頼政』の詞章等に代表されるものであったとすれば、DやEやFは

今は何をか期すべきと、唯一筋に老武者の、是までと思ひて、平等院の庭の面、これなる芝の上に、扇をうち敷き、鎧脱ぎ捨て坐を組み、刀を抜きながら、さすが名を得し其身とて。埋木の花咲く事もなかりしに、身のなる果ては哀なりけり（『頼政』<sup>28</sup>）

この主人公の最期の「哀」と、その後日譚を語る神社縁起的仕立ての話であるといえる。対して、Gは『頼政』の平等院戦における敗者の印象から始まりつつも、「弓張月」の句を話の後半に寄せることによつて、

其時主上御感あつて、師子王といふ御剣を、頼政に下されけるを、宇治の大臣給りて、階を下り給ふに、折節郭公訪れければ、大臣取りあへず。ほととぎす、名をも雲井に上ぐるかなと。仰せられければ、頼政右の膝を ついて、左の袖を広げ、月を少目にかけて、弓張月の入るにまかせてと、つかまつり御剣を給り（『鶴』<sup>29</sup>）  
といった謡曲『鶴』の妖怪退治の英雄譚への連想を誘い、生前の頼政の活躍と武勇をもイメージさせる。

DとFの書き方と比べ、Gの前半の頼政の最期の場面、神社縁起的部分の方は略記的である。頼政神社の由来その

ものは『平家物語』や『頼政』、その他の説話等で、当時の人々によく知られていたと考えられる。郎等への命令から突然に始まるGの冒頭部は、いわば「既知の話」を前提とした始まりを感じさせる書き方である。その発端から続くGの語りは、頼政神社に「近き頃」依頼され納められた名筆の額、さらにその意匠が頼政の歌に由来するものである、といった、歌人や「連歌誹諧せむ人」にとつて称揚すべき興味の話題の方向に向かっているのではないだろうか。一雪の説話は、先行する「古」の逸話や縁起を踏襲しつつも、「今」も尊崇を集める頼政宮の「名句の額」への関心へと、話題の視点を移している。そこには、武将歌人頼政の「文事」の顕彰への興味にも惹かれる作者の説話態度が感じられる。その語り口も、後の『新著聞集』勝蹟篇卷六「下野古河頼政神祠」に継承されることとなる。

様々な戦国軍記や軍談を基に成立したとみられる武辺咄が、出版刊行によつて当時の読者に大きな影響を与えたことは想像に難くない。天和四年序『古今犬著聞集』作者もまた、多くの広範な説話の収集の中で、また読者としても、当時の周辺の様々な作品群の影響を受けていた可能性が考えられる。『古今犬著聞集』と共通の話題をもつ『武者物語』『武者物語之抄』の逸話としては、本論で扱ったもの他にも、蟹才蔵、福島左衛門太夫正則の話や、関ヶ原合戦譚などがある。当時流布し人口に膾炙された武辺咄集的作品である『武者物語』『武者物語之抄』は、一雪の豊富な説話蒐集の素材源となり得る位置にあるとみられるが、彼は先行説話を単純に伝承するだけには留まらなかったようであり、それぞれの話の造型や語りの視点には微妙な違いがみられる。

『古今犬著聞集』の雑多な武家説話のうち、延宝天和期の「最近の事件」、將軍家や大名家の政治的内部事情に關わる「今」の話が、一種の「実録的」に詳細な叙述態度によつて、先に論じた<sup>(2)</sup>作者の情報源である活動圏や人脈の問題も重視すべき点である。その一方で、本論で扱った過去の有名な武将の「歴史的」な「古」の武家説話を、寛文や延宝の「今」の時代に生きる貞門俳諧作者の一雪が、「連歌誹諧せむ人」らしい文芸的な語り口を用いつつ語っている点も、重要であると考ええる。

兵学的実践術を意識した軍談や、「軍」を武人のより臨戦的な視点から語ろうとする武辺咄集的作品の性格と比べ

ると、『古今犬著聞集』の「語り」には、「今」の世の「誹諧せむ人」たる作者による、歌語的修辭や連鎖的構成等、独特の文芸的、美的な造型や文飾がある。それは、言語の本意を逸脱した談林的・西鶴浮世草子的な「饒舌な（はなし）程、過度なものではないとしても、である。かつて田中宏は「武辺咄の面白さ」を「力強く率直な原木の良さ」とし、比較して「西鶴の作品でさえ」「つくりものといったひ弱さを感じさせて了う」と評した。その「つくりもの」的感覚を発生させていく文芸的な表現の傾向は、西鶴以前の仮名草子、貞門誹諧作者の手による説話集に、既に始まっているのではないだろうか。

もはや戦国の世ではない時代、十七世紀後半の作者たちの「語り」に、徐々に共有されている文飾の余裕の感覚がある。もちろん、実録的な要素の濃淡や、「書くこと」の虚実の「自覚」の度合は、同時代であろうとも、作者によつて異なる。一雪の場合は、こうした雑話蒐集から始まり、後の『日本武士鑑』等にもみられるような「太平の世」における「武」の精神美や「誠」を意識する作品の造型へと向かつていったのではないか。それは、作者が存在している文治の時代の「今」の視点から、「古」の世の「軍」に対する独特の価値認識を与えていくことでもある。このことについては、仏教的「慈悲」と分別の精神性を尊重する椋梨一雪の様々な武家教訓説話の性質や、その後の西鶴武家物への批判の問題等との関係において、追考としたい。

### 注

- (1) 大久保順子「説話にみる文事の志向——『古今犬著聞集』序文と考証的説話——」（『文藝と思想』86、二〇二二年二月）
- (2) 井上敏幸「椋梨一雪年譜稿」（『近世文芸』32、一九八〇年三月）
- (3) 菊池真一「武辺咄」の成立と展開、水田潤編『近世文芸史論』（桜楓社、一九八九年一〇月）所収。
- (4) 『古今犬著聞集』本文は東北大学附属図書館狩野文庫蔵十二冊写本本文を底本とする『仮名草子集成 第二十七卷』（東京堂出版、二〇〇〇年七月）『同第二十八卷』（東京堂出版、二〇〇〇年九月）に拠りつつ、引用に際し句読点や改行位置等を底本本文に照らして改めた。



- (5) 大洲市立図書館矢野玄道文庫蔵、刊年不明十四行本（国文学研究資料館新日本古典籍総合データベース、<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100227478/viewer/39>）に拠り、新日本古典文学大系『仮名草子集』（岩波書店、一九九一年二月）所収本文を参照した。
- (6) 『醍醐隨筆』国文学研究資料館鶴飼文庫蔵、寛文十年板本 <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200020297/viewer/9>（新日本古典籍総合データベース）を参照。
- (7) 本文は『仮名草子集成 第六十八卷』（東京堂出版、二〇二二年一〇月）所収の『武者物語之抄』及び国立公文書館内閣文庫蔵寛文九年刊本（国立公文書館デジタルアーカイブ画像）による。句点は本文に基づき、読点は適宜引用者が補った。
- (8) 井浦芳信『武者物語』の性格（昭和女子大学『学苑』590、一九八九年一月）にも二作品の関係が指摘される。
- (9) 菊池真一・西丸佳子編『武者物語・武者物語之抄・新武者物語 本文と索引』（和泉書院、一九九四年三月）所収の菊池真一「解題」に拠る。
- (10) 田中宏「武辺咄『武者物語』について」（『文学研究』80、一九九四年一二月）
- (11) 森暁子「松田秀任と加賀——『武者物語』・『武者物語之抄』の記述をめぐって——」、平成25年度～平成27年度国文学研究資料館共同研究（特定研究）成果報告書『歴史叙述と文学』（二〇一七年三月）
- (12) 新日本古典文学大系『謡曲百番』（岩波書店、一九九八年三月）
- (13) 『仮名草子集成 第四十六卷』（東京堂出版、二〇一〇年九月）
- (14) 日本随筆大成新装版 第三期『翁草（2）』（吉川弘文館、一九九六年三月）
- (15) 『仮名草子集成 第二十七卷』（東京堂出版、二〇〇〇年七月）所収本文を参照し、引用に際し句読点の位置等を底本本文に照らして改めた。
- (16) 奥野高広・岩沢愿彦校注『信長公記』（角川書店、一九九二年一月、第七版）
- (17) 『日本書画苑』第二（国書刊行会、一九一五年二月）所収。
- (18) 佐藤博信「室町・戦国期における小山氏の動向——代替わりの検討を中心として——」、松本一夫『下野小山氏』（戎光祥出版、二〇一二年六月）所収。
- (19) 注（7）に同じ。
- (20) 注（4）及び京都大学附属図書館蔵本、『大惣本稀書集成 雑話一』（臨川書店、一九九六）参照。
- (21) 金子金治郎『連歌師兼載伝考』（南雲堂桜楓社、一九六二年一〇月）では『會津風土記』等にもみる兼載の「文明年中」出生説も紹介



介する。綿拔豊昭「猪苗代兼如とその周辺——兼如の伝記を中心に——」(『連歌俳諧研究』68、一九八五年一月)は、天正七年夏から十年夏の兼如の下国を指摘、この期間の東国歴訪を推察している。

(22) 延宝三年林春斎の巻頭文あり。日本随筆大成第一期第五卷(吉川弘文館、一九二七年八月)所収。

(23) 『新訂増補 史籍集覧 十六 武家部 戦記篇四』(臨川書店、一九六七年九月)

(24) 日本随筆大成第三期『翁草(1)』吉川弘文館、一九九六年三月)

(25) 注(12)に同じ。

(26) 注(12)に同じ。

(27) 大久保順子「延宝八年」の仏教説話——『古今大著聞集』所収話考(2)——(『香椎潟』49、二〇〇三年六月)

(28) 注(10)に同じ。